

原初の神・タカミムスビとカミムスビ

【日本神話】 国生み

古事記はその冒頭において、原初の17柱の神々の誕生を描きます。最初に、**アメノミナカタシ**、**タカミムスビ**、**カミムスビ**という特別な神が現れました。なかでもタカミムスビは、天皇家の祖先神である**アマテラス**に天孫降臨を指示したり、初代天皇である**神武天皇**の東征を助けたりするなど、天皇家・朝廷にとって非常に重要な神です。

やがて、17柱の神々の最後に誕生した**イザナギ**（男神）と**イザナミ**（女神）により日本の国土と他の神々が誕生することになりますが、両神が生んだ淡路島、四国、隠岐島、九州、壱岐、対馬、佐渡島、本州は、「**大八島（おおやしま）**」と呼ばれ、当時の国土意識を示しています。（北海道・沖縄は含まれず、「本州」も実質的には西日本を指しています）

その後もイザナミは多くの神々を産みますが、火の神**ヒノカグツチ**を産む際に大火傷を負い、死者として**黄泉（よみ）の国**に降ります。妻を追って黄泉の国に向かったイザナギですが、妻との約束を破ってしまい、永遠の別離が訪れます。イザナギが黄泉の穢れを祓うために**禊（みそぎ）**を行うと、**アマテラス**、**ツクヨミ**、**スサノオ**などの主要な神々が誕生しました。

【対馬の伝承・異伝】

原初の神々のうちもっとも重要な**タカミムスビ**が、対馬南部の厳原町豆酸（いづはらまちつつ）の海岸沿いに鎮座し、対馬から磐余（いわれ。奈良県桜井市・橿原市）に遷座しています。磐余は、初代天皇である神武天皇の名「**カムヤマトイワレビコ**」（大和の磐余の尊い日子）に表れているように、大和朝廷の起源とされる土地であり、対馬が古神道の源流のひとつとされる所以（ゆえん）です。

また、同様に上県町佐護（かみあがたまちさご）には**カミムスビ**が鎮座しており、対馬固有の神である**タクズダマ**は、両神の子神とされています。

豆酸、**佐護**はそれぞれ、河口の平野部に位置する集落であり、遺跡・由緒ある神社が多く、古代の占いの技術・**亀卜（きぼく）**を伝承していた、など共通点が多い集落です。豆酸は対九州の、佐護は対朝鮮半島の港として、古くから開けていたことも関係しているようです。

また、国土創造における対馬の別名は**アメノサデヨリヒメ（天之狭手依比売）**という女性名で、魏志倭人伝に描かれた荒々しい男性的なイメージとは対照的です。島の中央に、船乗りに安心を与える穏やかな内海・**浅茅湾（あそうわん）**が広がっており、海の女神のイメージが重ねられているのかもしれません。

アメノサデヨリヒメは数社で主祭神として祭られていますが、対馬そのもの＝「国魂」が出雲（いずも）地方の大国主（オオクニヌシ）を連想させるためか、祭神が出雲系の神々にすり替わっている場合もあるようです。